

ユアー訪問看護リハビリステーション

松山耀

代表



☎ 055-207-9060

🌐 yourmedi.co.jp

🏠 山梨県南アルプス市小笠原2103

ビジョン

病気だけを見るのではなく、その人の人生に寄り添う“王道”の訪問看護を。

住み慣れた自宅で最期まで自分らしく生きる願いを支え、情熱と責任を持って地域へ安心を届け続けます。

南アルプス市・中央市を中心に、訪問看護と訪問リハビリを通じて地域の在宅療養を支えているユアー訪問看護リハビリステーション。代表を務める松山耀さんは、看護の道へ進んだ原点から、病院・介護現場での経験、訪問看護との出会いを経て、地域に必要とされる事業所づくりに取り組んできました。本記事では、松山耀さんが南アルプス市でユアー訪問看護リハビリステーションを設立した背景、中央市への展開、スタッフが安心して働ける体制づくり、そして地域全体で在宅療養を支える訪問看護への想いを伺います(2026年4月取材)。

看護の道への転機と、訪問看護につながる原点

看護師を目指したきっかけを教えてください。

高校までは、サッカーに打ち込む毎日でした。目の前の練習や試合に全力で向き合う一方で、卒業後にどんな道へ進むのか、当時はまだ明確に描けていたわけではありません。

そんな時にいただいたのが、横浜看護専門学校の指定校推薦のお話でした。周囲にも看護の道を目指す仲間がいて、それまでぼんやりとしていた進路が、一気に現実味を帯びた瞬間だったことを覚えています。

もう一つ、大きな原点があります。以前、自分自身が入院した際に出会った看護師の方々の姿です。忙しい現場の中でも、明るく、力強く、そして自然体で患者さんに接していた。その姿が強く印象に残っていました。

人を支える仕事でありながら、そこには確かな活気がある。誰かの不安を和らげ、安心を届ける。その姿に、言葉にできない魅力を感じていたのだと思います。

さらに、地元を離れて横浜で一人暮らしをしながら学ぶという新しい挑戦にも惹かれました。環境を変えることは不安もありましたが、それ以上に、自分を成長させたいという気持ちが勝っていました。

そうして看護学校へ進学し、3年間の学びと実習を通して、看護師としての土台を築いていきました。今振り返れば、あの時の選択が人生の流れを大きく変えたと思っています。

看護学校卒業後はどのようなキャリアを歩まれたのですか？

卒業後は、系列である現 JCHO山梨病院に入職し、一般内科・消化器内科病棟で3年間勤務しました。当時は、今ほど男性看護師が多い時代ではなく、病棟内でも数名という環境でした。ただ、仕事そのもの



には強いやりがいを感じていました。

病棟では、医療の厳しさも、人の温かさも学ばせてもらいました。患者様の状態は日々変化し、判断の連続です。忙しさの中でも、丁寧さを失わずに向き合う先輩方の姿勢には、何度も背中を押されました。

看護技術だけではありません。ご本人やご家族の不安にどう寄り添うのか。言葉にならない想いをどう受け止めるのか。医療職として、どんな責任感で現場に立つべきなのか。

そうした“看護の本質”を、日々の現場の中で教えていただいた3年間でした。

今の自分があるのは、あの病院時代の積み重ねがあったからこそです。看護観も、仕事への向き合い方も、あの時に形づくられたと言っても過言ではありません。

看護観や仕事への向き合い方の土台になっています。

病棟看護師として3年勤めたあとは、どのような職場で働かれたのですか？

病院で経験を積む中で、ある違和感を持つようになりました。施設から褥瘡が進行した状態で入院される患者様。治療によって回復し退院されたにもかかわらず、再び状態を悪化させて戻ってこられる患者様。

もちろん、誰か一人の責任ではありません。けれど、「病院の中だけで頑張っているけど、根本的な解決にはならない現実」がそこにありました。当初は、医療側の視点から一方向に物事を見ていた部分もあったと思います。しかし次第に、「現場で起きている問題には、個人の努力だけでは変えられない構造的な課題があるのではないか」と考えるようになりました。

それなら、自分の目で確かめたい。介護現場では何が起きているのか。本当の課題は何なのか。そう思い、派遣看護師としてさまざまな現場に入る道を選びました。

短期間で多くの現場を経験することを重視し、3~4か月ごとに職場を変えながら、特別養護老人ホーム、デイサービス、療養病床など約10か所を経験しました。

外から評論するのではなく、自分で中に入って学ぶ。課題も、努力も、工夫も、現場の苦悩も、すべて自分の肌で感じたいと思ったからです。

この約2年半の経験は、私の価値観を大きく変えました。そして後の訪問看護、在宅医療、地域での起業へとつながる原点になっています。

実際に10か所ほど現場を回ってみて、感じたことはありましたか？

派遣という立場で、さまざまな介護・医療の現場を経験する中で、強く感じたことがあります。

それは、褥瘡の悪化やケアの質の低下といった問題は、決して現場で働く一人ひとりの努力不足ではないということでした。むしろ、その背景には「仕組み」の課題が大きく横たわっていました。慢性的な人手不足。必要な知識や判断基準が十分に共有されていない環境。看護師と介護士の連携不足。意思決定の遅さ。現場の声が届かない組織構造。

どの現場にも、真面目で誠実に利用者様へ向き合っている方が...



続きはQRコードからアクセスしてください → → →

